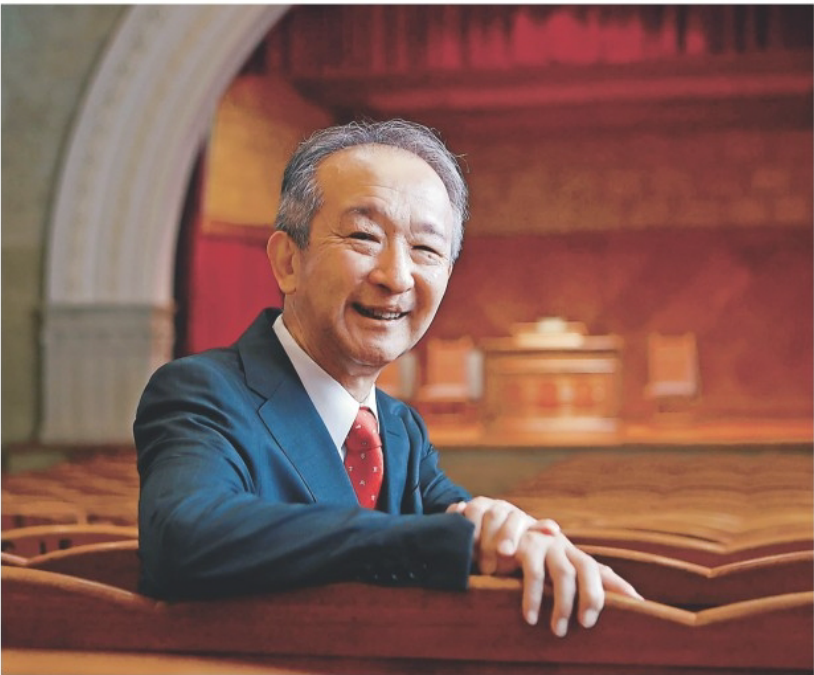


編集委員インタビュー

神戸女学院院長 飯 謙さん(70)に聞く



これからの女子大学の存在意義は？



西宮市、神戸女学院大学

少子化を背景にした学生の減少で、女子大学が岐路に立っている。学生の募集を停止したり、共学化に踏み切ったり、各地で模索が続く。これまで女子大学が果たしてきた役割をどう意義付けなければならないのだろう。西宮市の神戸女学院は関西で最初に開学した女子教育機関で、今年で創立150年を迎える。飯謙院長(70)に女学院の歩みを振り返りつつ、思い描く女子大学の未来像について聞いてみた。

(鈴木雅之)

神戸女学院は関西で最初の女子教育機関です。そもそもの始まりについて教えてください。

「1873(明治6)年にまず私塾として始めました。女性アメリカ人宣教師のタルカットとタッドレの2人が、有馬温泉で静養中に、三田藩主の一族の女性たちから『娘のための学校を開いてほしい』と頼まれて設立したと伝わります。正確な場所は不明ですが、神戸・花隈とされ、はじめは支援者の家を借りたようです。学校というよりは、子どもたちが遊びに来るような場所、学童保育に近い感じだったのだと思います。体系的な学びの場としては、2年後の75年10月に『女学校』という名前で開校しました。『によつこう』とも『おんながっこう』とも読んだみたいです。神戸女学院の開学の起点です」

「女学校開校の3年前には明治新政府が学制を公布し、すべての国民に教育を受ける機会を提供する『国民皆学』を目指していました。なのになんとして三田藩の人たちは娘を学校に通わせなかったのか。一つは、まだ身分制が完全にはなくなっていなかったということがあるかと思えます。もう一つは、男女とも、子どもは重要な労働力で、学校に行かせられるような状況ではなかったことも影響していると思います。女の子に勉強は必要ないとも考えられていた時代ですから、女子を通わせられる学校は限られていたのではないのでしょうか」

それから今に至るまで、女子大学が果たした役割についてどう考えますか。

「女性が学びづらい時代に、女性のための学びの場を確保する。やはりこれが女子大学の原点で、果たしてきた大きな役割だと思います。さらに言えば、その時代や社会が抱

既存のものではない発想示す／女性の連帯、男性の意識解放

ている常識とは違う道を示すこと、いわばオルタナティブな(既存のものではない)独自の発想を提示することが、意義として非常に大きいんじゃないかと考えています」

「神戸女学院でいえば、初期の卒業生はその後、各地で学校の創立に関わっていきます。リーダーとなる女性を地域社会に送り出してきたんですね。ここで言うリーダーというのは先頭に立つだけでなく、誰かを後押ししたり、仲間を盛り上げたりと、多様な姿を指します。広い意味で、共同体を活性化させる担い手ということですね。そうした女性を送り出すことができたのも、既成概念にとらわれない女子大学の意義だと思います」

オルタナティブな発想という言葉があります。ご自身が実感したことはありますか。

「雇用機会均等法の施行は1986年ですが、80年代に入ると、女性も男性のように卒業後は就職するという風潮が出てきました。私が大学を出て、神戸女学院に助手として採用されたのは83年です。高校、大学とも共学に通っていました。そこで出会った女性の学生で就職しないという人は基本的にいなかった。それはそれでいいことなのですが、同調圧力もあったと思います。つまり、就職しないのはどうなのか、と。ところが神戸女学院に来てみたら、就職希望の学生と同じように『私は結婚して母になろうと思う』と胸を張って言う学生がいました。それを認め合ってもいい。女性も就職という一方向に走りがちの中で、多様性や解放性があったと思うのです。そのことに私は目を開かされました」

院長は学生時代から女子教育を志していたのですか。

「まだ当時30歳の手前でしたからね。キリスト教の研究が続けようと思っていたころへ、神戸女学院に採用してもらいました。はじめは女性ばかりに慣れなくて、食堂に行くのも緊張したんですけど」

「私自身、女子大学の教育にある自由な気風に、研究者として育てられました。先ほどオルタナティブな発想と言いましたが当初は私にも、若者が胸に抱く『一旗揚げる』みたいな発想があったはずなんです。で

もそうではなくて、みんなが共に認め合って成長していくという今の私の視点は、女子大学で醸成されたものだと思っています」

全国的に女子大学を取り巻く状況は厳しくなっています。神戸女学院のこれからをどう描いていますか。

「神戸女学院が共学化することはありません。その方針は理事会でも確認しています。先達の志を継承する使命があります。女性同士の連帯感是非常に強いものがあります。共学大学でもできるじゃないかと思うかもしれないけど、女子大学で形成されるような女性同士の連帯感や相互扶助の力には、共学ではつくり上げられないものがあります」

「私は男として、ずっとそでで見てもなく支配するでもなく、互いが同一地平なんです。女子大学の学生にはそういう価値観が根付きます。もちろん男性同士だって、そういう連帯は可能かもしれない。しかし、女子大学の学生はそういう連帯の自覚的な担い手となることができます。それが男性にとつてのモデルにもなり、男性の意識に解放をもたらす。そういう使命をこめて達成できるといふことであれば、女子大学として力を尽くしていこうと考えています」

では、日本の女子大学の存在はどうなっていくのでしょうか。

「ジェンダーギャップの現状をおかしいと思える意識や、アンコンシヤスパイアス(無意識の思い込みや偏見)に対抗できる女性を送り出すことは、女子大学の意義として今後も変わることはありません。アメリカではかつて200あった女子大学が現在、40を割ったと聞きます。それはもつぱら経営的な理由ですが、日本でも同様に辛い決断をせねばならない現実があります。ただ、数は少なくても踏みとどまる女子大学はあると思います。その中で、女子大学同士のネットワークの発信力は純度が高まり、強まっていくと思っています。そして、日本社会にとつてのオルタナティブを発信し続けていくこと。この点に、これからの女子大学の意義を見いだしたいと思っていますね」

いい・けん 1955年岡山県倉敷市出身。明治学院大卒業後、同志社大神学部、同大学院博士前・後期課程修了。83年、神戸女学院大助手に就任。95年に教授。学長などを歴任し、2018年4月から院長。専攻はキリスト教学、聖書学。